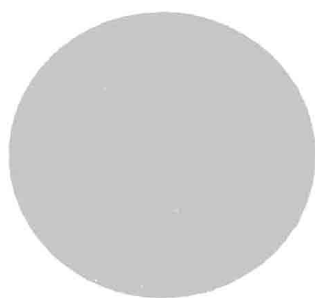


井上光晴

自由を
われらに

井上光晴
自由を
われらに



自由をわれらに

一九九二年十二月一〇日 第一刷発行

著 者 井上光晴

© Ikuko Inoue 1992, printed in Japan

発行者 野間佐和子

発行所 株式会社講談社

郵便番号 一一二一〇一

東京都文京区音羽二一一二二二

電話 出版部〇三―五三九五―三五〇四

販売部〇三―五三九五―三六二二

製作部〇三―五三九五―三六一五

印刷所 株式会社精興社

製本所 牧製本印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります。

本書の無断複写（コピー）は著作権上での例外を除き禁じられています。
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にて
お取り替え致します。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書
第一出版部宛にお願い致します。

井上光晴

一九二六年旧満州（現・中国東北部）に生れる。幼少時に両親と離別し、長崎県で育つ。炭坑で働きながら、独学。四五年、日本共産党入党。最初の小説「書かれざる一章」、「病める部分」でいち早くスターリン主義批判を行い、五三年に離党。五八年、吉本隆明、奥野健男らと「現代批評」の創刊に加わり、以後本格的な作家活動に入る。七〇年には雑誌「辺境」を創刊、七七年には文学伝習所を創設する。天皇制や被差別部落、原爆被災者、炭坑の閉山など常に社会的問題に取り組んだ作品を発表し続けた。一九九二年五月三〇日、がん性腹膜炎のため逝去。享年六十六歳。代表作に「地の群れ」、「心優しき叛逆者たち」、「明日」等多数。

ISBN4-06-203788-2

自由をわれらに

装丁 田村義也

1 ひとり芝居

青方開放刑務所の日曜日、レクレーション室の舞台で行われる演芸の中で、現在最も人気のある演し物は、中将澄秋のひとり芝居であった。装束にいる時も、劇団・空間専属の役者としてそれなりのファンを持っていたが、この島にきて、まったく異質の芸を身につけたのだ。年齢は四十四歳、整った目鼻立ちにもかかわらず、顔の大きさが美形の均衡をかなり崩していた。

二年前の夏、文字通り二十世紀最後の年を象徴する殺人未遂事件として、彼の犯罪は大々的に報道されたが、実態はそれほどでもなく、通俗的な関係の清算であった。ただ彼はそれを観衆の面前で遂行しようとしたのである。一座の俳優でもあった彼の女房は、数年前から劇団主宰者と通じていた。舞台での役どころは盲目の暗殺者。そして実際に仕込杖の真剣は相手の胸を突刺したのだ。今も、中将澄秋は十八番の〈魅鰻頭〉を演じていた。今は昔、皇室の縁戚にあたる葵家の令嬢・葵静子に陥入りの生魅が復縁を迫る物語を大袈裟な身振りでおもしろおかしくこなして行く。

煎じ詰めていえば、鰻頭の分際なのよ、あなたは。あちらの行いが少々お丈夫だからといって、

何の名譽にもならないでしょう。

滅相もない祝儀を大真打の小南にはずんで、へ抜かず助六をやらせたのはどなたでしたっけ。助六よりすごいわね、何時も傍にいてと上ずった声を毎度おだしなされたのは、そちらさんでござんすよ。

大嫌い、そんないい方。意気がってるのかもしれないけど、虫酸が走るわ。……

屈折する笑いを耳にしながら、明野由行は右端の椅子席で幾度も上体をゆすった。舞台の所作にまったく精気が乏しく、台詞に力がないのだ。

何時もと違う演技の脆弱さは、ようやく囚人たちにも伝わり始めたのか、明野由行の周辺に、つねにないざわめきが起った。

「草菱レーヨン、あかんかったのか、矢張り。……」

「草菱レーヨンがどうしたんだよ」

「ばっさりいかれたのと違うか、というとるんや。このところ、株は軒並み全滅やからね。中将さんの持ってはる草菱レーヨンも大方がた落ちでっせ」

「中将さん、株やってたのかい」

「あらあら、しらっぱくれはって。見えすいたこといわんといてえな」

明野由行の左側からは、別のやりとりが伝わってくる。

「何や元氣ないな。ふらふらしてやがる」

「先週の面会で、やり過ぎたんじゃないの。……」

レクレーション室をでて、一旦居住棟へ向けた足を、明野由行は海際の方へ変えた。広場に幾つかできている人垣は、きつとランプ競輪が占いの類いだろう。金銭を賭ける賭博や商いは許されていないので、もっぱらマッチ棒の勝負になるのだが、単なるゲームでないのはいうまでもなかつ

た。

そのうちのひとつを覗いた彼の耳を、胴元の声はもろに叩いた。ひろげられた紺色の風呂敷に、七枚のトランプが裏返しにされて並ぶ。

「はい、先頭は風除けだよ。二枚目の札が一着だ。昨日今日の付合いじゃないんだから、くどくど説明しなくてもわかるだろう。……でもさ、あれだね、あとでいちゃもんつけられちゃ何だから、一応ルールだけでも説明しておくか。新入りさんもあることだしね。……はい、わかりますか。トランプはエースからキングまで13という数だ。ハートにクラブ、ダイヤ、スペードと四種類あります。どんなマークでもいい、とにかく13の数を四つに輪切りにする。これが選手の枠だ。1、2、3が一枠、4、5、6が二枠、7、8、9が三枠、ジャックにクイーンとキングが四枠。10は転倒で枠外。……はい、どんどん賭けて貰うよ。単は賭け金の二倍、連は五倍だよ。このレースは2、2が狙い目。胴元がいうんだから間違いない。……」

マツチ棒の賭け金と引換えに連や単の数字を記した車券が渡され、一通りの区切りがつくと、胴元は「ジャーン」といいながら、二枚目のトランプから順々にめくった。

「はい、着順ができました。スペードの6にダイヤの4、転倒の10は関係ないね、この際。はい、どんなじりに廻わしますよ。そうすると、6、4だから2―2だ。ほうら、いった通りだろう。胴元が予想するんだから外れっこないんだよ。はい、2―2のお客さんは五倍の払戻しだ。……」

明野由行はそこを離れた。すると、いくらも歩かないうちに鱒屋と呼ばれる男から声をかけられた。函館の実家（旅館）をことごとく吹聴するので、そんな渾名がつけられたのだ。

「立島からけつ割って（逃亡して）きたやつ、矢張り持たなかったらしいですね。……それとも逆目の注射でもうたれたかな」

「何時の話だい、それは。……」

「あれっ、明野さんは朝めしを何処で食べたの」鰯屋は白い不精髭に被われる顎をなでた。

「食べなかったよ」

「道理で……」

鰯屋は白波を立てている狭い水道の彼方に横たわる砦のような島を見た。

「どうやって手に入れたのか、全日空の救命衣を着ていたそうです。夜明けに外勤（監視員）が発見したといってました」

「それで、結局たすからなかったのかい」

「ええ、元々患者ですからね」

「患者といたって、体力はおなじじゃないの」

「明野さんの言葉とも思えないな、それは。こちらとは運動の質が違うんだから、足腰だってかなり弱ってますよ」

「全日空の救命衣をつけてたんじゃないの」

「つけていても、流されるのはおなじでしょう。よっぽど潮加減を判断しなきゃ、とてもじゃないけど辿りつきませんやね」

「辿りつけたんだろう」

「だから、仰天して、逆目の注射説まででてるんじゃないのかな。青方水道を渡ったなんていったら英雄ですからね、もう」

「もうひとつぴんとこないな」

「何が」

「どっちみち送り返されるわけだろう。こっちの島に渡ってきても、娑婆行きの船にはなかなか潜り込めないはずだよ」

「何だかおかしいよ、今日のフリスキーは。……あれ、わるいこといっちゃったかな」
「かまわないさ。フリスキーはフリスキーなんだから」

「勇気が問題になるわけでしょう。水道を渡り切ったというのは病気じゃないという証明にもなるし、予防拘置所のひどさを世間に訴える手段にもなる。……そうじゃないですか」

「予防の方だったのかい、その人は」

「お偉いさんの慌てようからいって、そうじゃないかと思うわけ。第一、医療の方からは夜中に、とても抜けだせないよ」

周囲五軒にも足りない立島には、医療刑務所と予防拘置所の施設があり、夫々、二百三人と二十九人、合わせて二百三十二名の囚人が収容されている。海底炭鉱であったかつての建物の一部を改修して夫々の必要棟が点在し、海際に張出されたコンクリートの旧中学校校庭に、看守たちの宿舎があった。犯罪人としての精神障害者が医療刑務所に拘禁され、確実に罪を犯す恐れありと予断された患者が予防拘置所に捉われていた。

九州西域の佐世保港と五島列島のほぼ中間に位置する青方開放刑務所の周囲は七軒半。デンマークやスウェーデンの施設をモデルにして、一九九六年五月に開設された収容施設には、二〇〇一年晩秋の現在、四百に近い囚人が寝起きしていた。

虫の好かぬ相手に好意をもたれる関係が、彼と罎屋のものだといえるかもしれない。そのせいか、一度まとわりつかれると、なかなかひとりになれないのだ。算盤という名の岸壁へ傾斜するアスファルト道路脇のベンチに並んで腰を下ろすとみせかけて、明野由行は不意に立ち上がった。「肝心なことを忘れてた。ファックスをおくる約束があったんだ」

稿料のない東京の演劇雑誌に、毎月、開放刑務所でみるテレビ評を書いているのは事実であったが、締切りは十日も先のことだ。それでも彼は手ぶらでファクシミリをおく部屋に行ってみた。

案の定、そこには精養軒と本郷がいた。どちらも渾名で、精養軒の方は何かといえはこの部屋にきて、嫂宛に決して返事のない手紙を書くのだ。だからといってファクシミリを使用するわけではなく、ただぼんやりと誰彼の操作を見ているだけなのである。しかしまだ鱧屋のべたつく声よりはましだろう。

「ファックスはあいてるよ」

「いや、そうじゃないんだ」

曖昧な声で頭を振りながら、明野由行はテーブルの椅子を引寄せた。

「明野さんは此処にくる前、猫専門のテレビドラマを書いていたそうだけど、どんなのかきかせてほしいな」

「デマだよ、それは。大方、フリスキーから連想したらしいが、猫を登場させたのは一度もない。テレビドラマなんて書いたこともないんだ」

「キャットフードの名前なんだろう、フリスキーっていうのは」精養軒はそこで割込んできた。「どっちにしろ、猫に関係あるんじゃないの」

「猫専門は嘘なのか、それじゃ」本郷はいう。

「そういうミュージカルもあったが、僕じゃない。ごく普通の芝居を書いていますよ、僕は。

……」

精養軒の本名は市橋真吾。開放刑務所では古株に属する四十代半ばの調理師で、実兄を殴り殺した「過剰防衛」の罪によって五年から九年にわたる不定期刑の瘦せた男であった。

「普通の芝居ですか、なるほどねえ」と、本郷はいった。官服から私服へ、移行した日からそのままずっと着古しているような、汚れたセーターの袖口をたくし上げながら。まったく四季を通じて彼は代わりばえのしない服装をしていた。もしかすると夏にはセーターを脱ぐだけなのかもしれ

ず、何処からも小包ひとつ送ってこなかった。

武井薬品の研究所で新薬開発に従事するかたわら、デパートの玩具売場に限って長期間、万引を続けたというのが、みんなの知る犯行の内容であった。

「そうそう、立島から逃げてきたの、駄目だったらしいね」

「逃げてきたのって、誰が」

首をのばすような恰好で、二人は同時に顔を上げた。

それから八十分後の午前十一時四十五分、明野由行は個室居房でテレビの画面に見入っていた。官給の備品ではなく、むろん私物であったが、それも私服への移行と同時に許可されたのだ。

『紙の狂気』というテレビドラマは、明らかに解体運動に敵対して、従来型の精神病院を存続させようとするキャンペーンの一翼を担っている。

千葉県の太平洋岸を見おろす台地の精神病院を、家族のたつての懇請で退院した青年の日々。ドキュメントタッチでカメラは追って行き、今それは最終の場面に近づきつつあった。

海辺の家の庭先で、蟹をゆでる大釜の赤黒いめらめらとした火焰。入江の渦に思い思いにピクニックの食事をとる人々の目をかすめて、後じさりするような足どりで、青年は漁師たちの住む暗い通りに踏み込む。

近海物の開いた小魚を干して並ぶ板の外れに、うなだれる枯れ葉の唐黍畑。するとそこに白い小猫がよたよたと迷い込み、ブラウン管いっぱいのにびた腕が、その襟首を抑え込むのだ。

小猫をぶら下げた青年の足はゆっくりと畑の傍の盛り上がった畔道をまたいで、海辺に引返す。ぶつぶつと泡を立てる青い渦。どこか胎児に似た白い塊はあちこちにできた潮溜りを避けながら、やがて蟹を煮る大釜に近づく。

小猫が火に投じられる瞬間、明野由行は身顫いしながらスイッチを切り、ふたたび戻すとドラマ

はすでに終っていた。

ストーリーにわざとらしさがなく、比較的の高いレベルの構成であるだけに、一層後味のわるさを感じる。彼の猫好きは異常といえるほどで、フリスキーと呼ばれる理由もそこからきていた。祝祭日に時折り行われる余興パーティで名差しをされた時、思いつくままにキャットフード・チキンの説明文を口にしてしまったのだ。

●フリスキー・チキンは新鮮な生の鶏肉をそのままたっぷり使い、新開発の調理法で丹念に仕上げました。自然のおいしさを生かした本物の味が、ネコの食欲をそそります。

●フリスキーはネコの健康に欠かせないビタミン・ミネラル・繊維質をバランスよく配合した高たんぱくキャットフードです。

●フリスキーはドライタイプなので、必要な量を食器に入れるだけでOK。同じ栄養量なら缶詰やセミモイストタイプのキャットフードよりもずっと経済的です。

●ネコは大変食習慣が強いので、食事の切り替えは愛情をもって気ながに行なって下さい。今までの食事にフリスキーを少量ずつ混ぜていき、その量を徐々に増やして一〜二週間でフリスキーにならして下さい。

●どんなにおいしいものでも、毎日同じ味ばかりでは飽きてしまうことがあります。目先を変えて他の味も与えてあげてください。いつもとちがうおいしさがネコの新たな食欲をそそります。

幼稚園の帰途、高架鉄道下の自転車置場に捨てられていた、まだ目のあかぬ小猫を拾ったのが、最初の昂ぶりであった。マッサージ師をしている父親に、なぜそれほど激しく叱責されるのかわからぬまま、五歳の彼は小猫を抱いて夜通し家に帰らなかったのである。

ノックの音がしたので、明野由行はドアを開けた。三号棟の四人部屋にいる村井義雄のたるんだ顔。

「何か……」

実際の年より十歳も老けて見える、髪の薄い男は、福神漬の小瓶を差出しながら、よくききとれぬ声を口にした。

「どうしたんだい、村井さん」

彼は福神漬の瓶を受取らなかった。

「家内が今日、面会にくることになりましたね」

「それはよかった。ずっと入院されていたんでしよう。じゃ、回復されたんだ」

「お蔭さまで。……」村井義雄はびよこりと頭を下げた。「実はそれで、明野さんをお願いがあったんですが、家内に会っていただくわけにはいかんでしようか」

「奥さんに会ってくれというの、僕に。……」

明野由行は怪訝な面持で問い返した。格別親密でもない相手の女房に会ってどうしろというのか。

「面会にくるという電話が昨夜遅くかかってきましたね。面会室が全部ふさがつるものだから、明野さんの部屋で話をさせて貰えないかと考えたのですよ。勝手なことをいって申し訳ありません。……」

ははあんと、彼は思った。要するに女房と会うための部屋を、貸してくれとっているのだ。面会室は大部屋と個室にわかれており、よほど前から申込んでおかないと、少数の個室を確保できないのである。

「いいですよ、この部屋をお使いなさい」明野由行はいった。「しかし、刑務部で許可しますかね」「ほかにもやつとる者がおりますから」村井義雄はいった。「明野さんに迷惑をかけるようなことは致しません」

「見て見ぬ振りをするのかな。……それだったら構いませんよ。面会時間は一時から三時まででしたね、確か」

「ええ」

「じゃ、その時間になったら真直ぐ此処においでなさい。ドアを開けておきます。三時過ぎになったら僕は戻ってきます。挨拶はいりませんから、どうぞ自由に引取って下さい」

「でもそれじゃ……」

「いずれにせよ、面会は三時までなんだから、それまでしか此処にはおれないわけでしょう。挨拶抜きで引取って貰った方が、こっちも気が楽ですよ」

「勝手なことをお願いして……」

ドアを閉めると、彼は椅子に残っている福神漬の小瓶に気付いて口許をゆるめた。まさかおっぱいではあるまいが、個室の居房を面会人に時間貸しすることが可能なら、それこそ新しい商売の誕生になろう。

四百人弱の囚人に対して、十の個室は、スウェーデンの開放施設と較べて、余りにも少な過ぎる。あちらでは居室や芝生での面会が自由なので、殊更の面会室は不要だというくらいなのだ。

昼食の時間が迫ったのを見て、彼は食堂への廊下を急いだ。嫌な足音がしたので振向くと、みんなにブローカーと呼ばれる男のひとりがにやにやしていた。物品の仲買いのみでなく、囚人の情報まで売買するので、便利ではあってもあまり接触したくない「人類」であった。

「そうだ、フリスキーさんならびったりかもしれない。目白、いりませんか。それも籠つき。……」

「目白って、小鳥の目白かい」

「そうですよ。青方じゃかなりの珍品ですよ」

「だって、いくら何でも小鳥は無理だろう」

「無理かどうか試してみたら如何ですか。案外すんなり行くかもしれないよ。今度のものでは、これまでちゃんとした飼主がいたんだから」

「そりゃ飼ってよければそうしたいが、非合法じゃ無理だよ、矢張り。……」

「ラブホテル並みに部屋の賃貸しだってできる時代に、目白を飼うぐらいたやすいものでしょうが。……啼き声が面倒なら、籠に風呂敷をかぶせるんだって、いつてましたよ」

食堂の出入口でブローカーと別れると、明野由行は、ラブホテル並みの賃貸しという言葉に引かなかった。村井義雄の件をあてこすったのではないにしても、なんとなく生臭い匂いを引きずりながら。

行列の献立は親子丼とカツカレーの二種類で、彼はカツカレーの皿を手にして、最寄りのテーブルについた。普段はもう少し時間をかけて同席者を選ぶのだが、なぜだかそころではない気分になったのだ。彼の坐った十人掛けのテーブルに親しい人間はひとりもいなかった。日頃、あまり言葉をかわさない連中が、周辺にずらりと並んでいる。

「カツカレーか。都城の病院で働いた時、こいつを皿のまま運んで行きよって、院長の顔に投げつけた患者がおったとよ。そいつがミス・丸橋といわれるとしゃんやったものやから、大騒動になったとたいね。……」

「そうそう、宇田川さんは精神病院の看護士をやったんやね。もぐりか何かしらんけど……」

「もぐりじゃなかとぞ。ちゃんとした免状持ちや」

「偉らかとたい、それなら」

「ミス・丸橋ちゃ何ね」

「デパートの名前が丸橋。その中でいちばんきれいだったとたい」

「何でまたカツカレーを投げよったんや」

「話が二つあったとよ。ひとつはカツカレーのカツが食べられんごと固かった。もうひとつは院長がそんな女にわるさをしよったむくい。……二つとも当たったのかもしれないばってんね」

「そいで結局どうなったと」

「騒動のわりにはどうにもならんかったな。女は特に隔離もされんやっだし、院長も相変らずの姿勢やった」

「ミス・丸橋とかいうとったが、美人がどまぐれると、余計にたまらんごとなるのと違うか。役得だと思つて、男どもは次から次に手をだしよるし……」

「いや、そういう暇もなかった。カツカレーの騒動があつて半年ばかりしてからあつさり内臓の病気で死によったとよ。……臍臓とかいいよったばってんね」

「惜しかことしたばいね、そりゃ。……」

明野由行はなおも部屋の賃貸しについてこだわっていた。福神漬が果して賃貸しになるか、というような自身への切返しが宙に浮く。

「青方で目白を飼つてゐる話、きいてますか、みなさん。……」

自分でも思いがけぬ声が、明野由行の口からでた。

カツカレーを掬うスプーンの音が止むと、宇田川というグループ長格の男が「へえ、目白を飼つてゐるのか。豪儀だね、そりゃ」といった。偶然の一致なのかどうか、そのテーブルにいた全員が、カツカレーの皿を抱えていた。

「あんたが飼うとるとね」

「とんでもない」彼のおいたスプーンが滑った。「ちらっと耳にしたものだからね。みなさんのことだから、情報早いかと思つて」

「知らんな、それは」鼻の太い男がいう。「きいとらんよな、みんな。……目白なんていうたらあん